

# 山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、  
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。  
現役山大生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1

1 笑顔で社員との意見交換に臨む上田さん。社員がのびのびと発言できるように自ら和やかな雰囲気をつくり出している。



2

2 左から2番目が伊藤忠商事のシカゴ支店に勤務していた頃の上田さん。30歳、商社マンとしての充実期。苦手だったビジネス英語もこの時に現地で体得した。



3

3 原発の計画的避難区域に指定された福島県川俣町の仮設住宅内で川俣町長と。ファミリーマートがコンビニ業界でいち早く仮設住宅内に出店し、被災地の生活を応援。

## 「元気・勇気・夢」を座右の銘に、 東北人の粘り強さで運命をパワフルに切り拓く。



上田 準二 株式会社ファミリーマート 代表取締役社長

行動力の成果

今や私たちの生活に欠かせない存在となっているコンビニエンスストアだが、その代表的な大手チェーンの社長・上田準二さんは本学の卒業生。秋田県出身の上田さんは、本学を受験することを決めると大学の学生自治寮に「私は山形大学を受験する予定の学生ですが、受験日までその寮に寝泊まりさせて頂けないでしょうか」と手紙を書き、寮長から快諾を得て1カ月ほど前から泊めてもらっていたという。また、就職活動の際には、学生課に行き「東京から就職案内があったら、一番に自分の名前を書いておいて欲しい」とアピール。伊藤忠商事への就職を決め、希望の地、東京へと旅立った。どちらも将来の大物を予感させるエピソードだ。そんな上田さんの学生生活はというと、ペンキ塗りからガスタンクの工事、旅行代理店の添乗員

などのアルバイトに明け暮れた日々だったという。それでも成績優秀だったのは、友人から借りたノートと小さい頃からの読書習慣、そして先生の教えをただ暗記するのではなく、自分で考えをどんどん深掘りし、新しいものを生み出そうとする姿勢があったから。特に、教えてもらうだけではなく自分で考えるという思考の癖は、他の人とは違う新しい視点で物事を考える上で社会に出ても役立ち、引いては新規ビジネスや新発明につながっていった。

伊藤忠商事入社2年目に配属された畜産部では、まだ輸入肉が珍しかった時代ということもあって先輩から引き継げる顧客も少なく、ほぼゼロからのスタート。しかし、東北人ならではの粘りでどんどん販路を広げることができた。さらに、英語があまり得意では

なかった上田さんだが、シカゴ赴任でビジネス英語もマスター。現地に出て自分を追い込まないと、本当のビジネス英会話など身に付かない、という自らの体験を踏まえて、若い人にはどんどん世界に出て行くようにと勧めている。その後、同社畜産部長、プリマハム取締役などを経て平成12年に顧問としてファミリーマートに入社し、平成14年には社長に就任。さまざまな局面でトップとして英断を下し、企業の舵取りをしている。

上田さんの座右の銘は「元気・勇気・夢」。元気を出して勇気を持って進んでいけば必ず夢につながるという思いが込められている。東北人であることを自らの長所と表現する上田さん。今後は、震災で傷ついたその東北を元気にするために何らかのカタチで尽力したいと考えている。